

幼児の視聴覚教育

太田 静 樹

一、今日の保育の特色は視聴覚的方法をふんだんに取入れられるようになったことである。例えば大正時代のそれと比較すると当時まれに幻灯や紙芝居などが用いられたことはあっても、それは一般化したものではなかったし、保育の問題として恩物のことは相当詳しく論じられても幻灯や紙芝居のことは殆んど問題にせられなかった。むしろ談話としてのお話の仕方がやかましく言わ

れていた。今日の幼児は早くからラジオや映画やテレビに親しんでいる。これは社会状況の変化によるが三十年前には想像されなかったことである。幼稚園にも今日では驚くほど、視聴覚教具が設備せられるようになった。しかしそれでもって簡単に今日の幼稚園が近代的になった、内容が有意義になったとは言えない。要はその視聴覚的方法が十分現代的に生かされているか、どうかとい

うことである。その為には視聴覚的方法の機能と保育の本質とをからみ合せて考えなければならない。保育における視聴覚教育の重要性はその研究において他の学校部門に比して低調であるといえ、決して劣るものではない。むしろますます必要になってきており、これは現代社会の要諦であるといつてよい。

二、大体視聴覚的方法が学習に利用せられるのはそれが経験を豊かにし、経験を一般化するのに役立つ為である。これを保育について考えてみたい。

今日の視聴覚的方法は高度に発達した機械器具によって、今まで直接経験出来なかつた微少、極大、遠隔の世界の事物事象をニュース、写真、あるいは音として容易に身近にもたらし出すことが出

来る。機械器具によつて極度に正確に現実に、これを科学性というならば、大いに科学性を發揮してその経験領域を拡大し学習に役立てることができるのである。しかしこのことは幼児にはあまり適用されない。何故ならば幼児には時間、空間の觀念がまだはっきり確立されていないからである。幼児はニュースよりかは童話、写真よりかは紙芝居がよいのであつて、これは幼児がまだ自己中心のことであり物事をいかに科学的に提示されてもその意味が十分に理解できないのである。むしろ、お話として時・空を超えた想像的なものが好まれる。経験を豊かにするといつても、それはデールが多く事例をあげて説明しているように、多感覚

的な、新鮮な、関連的な、情緒的な、完遂的な経験をもちつとことでは直接的な具体的な経験ほど、確かな強いものであるが、しかし幼児の経験はそれに限られていないし限つてはならないと思う。むしろ、文字は読めないが、かえつてお話などによつて想像をたくましくしていろいろな人生を経験することが出来ると言へるのであつて、それによつて幼児は生きいきとした情意の活動を盛んにするのである。そして視聽覚の方法は元來そのように想像、情意に強く訴える性質を持つていたのであつてこれを芸術性と言ふならば、保育においては科学性よりも芸術性においてその経験を豊かにすることが出来る。紙芝居、幻灯、映画、ラジオ、テレビ

などをみても分るように、色彩、音楽、リズム、効果音、劇化などの要素を巧みに配合構成して内容豊かにお話を作り出すことが出来る。今までお話といへば教師の談話としてなされていたものが、今や視聽覚的方法によつて立体的に、リズム的に、空想的にお話を多彩な形態にて提供することが出来るようになり、そのお話も昔話的なもの、生活的なもの、音楽的なもの、社会自然的なものなどを豊かに含み、幼児はこのような豊かなお話的環境においてそれを十分楽しみ味うことが出来るし、その効果も著しいのである。

三、しかし視聽覚的方法の特質は豊かな経験を一般化することにあると言われている。具体的な経験をより抽象的な過程を経て一般化に進めることにおいて視聽覚の方法は最も有効とされている。視聽覚の教材は機械的な構成によるだけに、かえつて自由に学習のいろいろの段階に応じて利用することが出来るのである。一般化と言へば幼児もすでに早くから経験的にやつてきている。例えば言語など自然に習得して一般的に使えるようになっていくし、その他の活動においても経験的に会得して自分のものにしてきている。これを始めから学習的に会得していくといふことは幼児にはむずかしい。何故なら一般化していく為にはある程度表象

関係からの推理、判断が必要なのであるが、幼児は多くは行動的、想像的、楽しみの仕事しかできないからである。ごっこ遊びなどをみてもそうである。このように学習的に一般化の為に視聽覚的方法を利用することはなくとも、保育では視聽覚的方法による経験を有意義にする為にそれ自身につけていくようにすること、すなわち自己活動化していくことは必要である（これは経験的に一般化していくものとも言える）。例えばお話をきくたびに深く味うようになり、あるいはそれを実践したり、あるいは劇化できるようになり、あるいは音楽やリズムが自然と表現できるようになることなどである。同じ話、同じ音楽でも何度きいても一層楽しく味い受入れられるようになることである。その為には内容が秀れたものであり、何度も繰返して経験することが必要である。現在の視聽覚教材や方法が幼児の為に必ずしもそのようになっていないと思わないが、そこは教師の指導によらねばならない。秀れた内容を作るといふ点においては今日の新しい方法の教材ほど、まずまず高度の機械化と技術と優秀なスタッフの組織化によってそれが総合され、とうてい個人的な教師の及ばないものが作られたつある。故にこれをどう受止めるかということが個々の教師の大きな問題になっているのである。

四、結局、幼児の経験を豊かにし有意義にする為には、勿論、直接経験を重視しなければならないが、それを教師の力のみによつてなそうとするとときには、自らそこに個人的な限界と偏狭のあることを恐れなければならない。教師の力の強さと魅力が認めながらもその弊害を是正し更にその力を拡充する為には、視聽覚的方法は不可欠のものとなるのである。教師の過信がいつの間にか教師中心の保育になっていることは今日においても変りないのである。より豊かな環境によって自由に有意義な活動を発展せしめることは保育の願ひであるが、視聽覚的方法はその為に豊かな芸術性と構成力を發揮して、刺戟に富んだ環境を提供しようとするものである。

しかしその際、視聽覚的方法に関しても問題のあることが忘れられてはならない。例えば教師の地位の後退をどう考えるかということ、視聽覚的教材は刺戟が強すぎるということ、幼児を受身的にするということ、これらのことは単に保育についてのみならず学校教育全般を通じて視聽覚的方法を取入れるや否や起つてくる問題でもあり、しかもそれらは教育の根本問題につながる重要なものである。これらのことをよい加減にして視聽覚教育を扱い論ずることは出来ないと思うし、大いに研究せられねばならないことである。

（奈良学芸大学）